

や *The Yellow Book* に出る Evelyn Sharp の『もう一人のアンナ』(*The Other Anna*) や『うす茶色の服を着てみても』(*In Dull Brown*) などは、女性の変身願望をテーマにしたものであるが、これらは比較的明るいもので、それほど重圧感のない作品の部類に属する。一方、Netta Syrett の書いた『文通』(*A Correspondence*) や『心からの願い』(*Thy Heart's Desire*) などは同一のテーマを扱っているものの、その内容は世紀末の不毛と衰退を訴えたものとなっている。

イギリスの世紀末文学よりもさらに過激なものにしたのは、フランスの世紀末作家である。仮面の本質を追い続けたジャン・ロラン、それにマルセル・シオプ、オクターブ・ミルボーなどの作品も、変身の究極であると言える。また、「高級娼婦」をテーマとして持ち出したユグ・ルベルの作品や「泥棒」をテーマとしたジョルジュ・ダリアンの作品も捨てがたい。紙数がないので詳しく書けないが詳細については今秋公刊することになるので、それをお読み願えればと思っている。

オスカー・ワイルドのウィット

木村克彦

(作新学院大学専任講師)

ワイルドは、自己の才能に惚れたナルシスであった。しかし同時に、自己の宿命を厭うたキャリバンでもあった。

ワイルドの才能には、よくもの見える〈心眼〉というものがあつた。しかし〈肉眼〉のみの浅薄さの魔力をも、ワイルドは知っていたであろう。「浅薄な者だけが自分を知っている」(『警句集』)ワイルドは、決まり文句をひっくり返し社会通念の盲点を突くが、ここで傾注すべきは、ワイルドが決まり文句をひっくり返したということよりも、決まり文句はひっくり返せるということだ。また、ワイルドの逆説すら、その逆も可能であったりする。故に私たちは、彼の逆説を通して、この世には万人を代入し得る〈公式〉などないということを認識できよう。Richard Ellmann も言う。“His paradoxes would be an insistent reminder of what lay behind the accepted or conventional.” 人は当然、過ちを犯すが、当然のごとく犯された過ちほど気付かれぬもので、それも共通な過ちであれば尚更お互い気付くまい。

因襲的な型にはまってしまえば、迷うこともなく、幸福であろう。ワイルドを迷わせたものは、彼のウィットの才に他ならぬ。“I have nothing to declare except my gen-

ius.”——〈天才〉はワイルドにとって、〈負債〉でもあった。

しかし、この〈迷い〉にこそワイルドの古典性があるかもしれぬ。葛藤を拒否することは人間の本质に悖ることであろうから。ただしワイルドには、意味のあるものとないものの葛藤があったというより、両極のそれぞれに意味があり、またもしかするとそれぞれに意味がないかもしれぬことまで見えてはいなかったか。また、ワイルドの作は、必ずある部分で正道をとっている。サロメの対極にヨカナーン。ドリアンが不変なら、肖像画が変貌。ヨカナーンが自ら進んで井戸を出たりはしない。傾寄りは排され、ワイルドは迷う。

また逆説は、通説を裏返すことからではなく、真理に触れ得る直覚力から生まれてくると思われる。ワイルドは、この世に潜む逆説を発見したのだ。発見には直覚が必要である。また真理は創作するものでなく、発見するものである。しかし、絶対的・普遍的真理などないというのは、おそらく真理であろう。

ところが、逆説家ワイルドも〈悲哀〉をひっくり返すことなどできなかった。ワイルドは幸福な王子やナイチンゲールのごとく「人生の傷」に極度に敏感であった。ワイルドはこの傷を遠ざけんがために〈イナセンス〉を志向し、『まじめが大切』において、ノセンスを出発点として、〈虚構が真実、真実が虚構〉という何ものも傷つけぬウィットの世界を具現。現実にはワイルドにとって美しくない嘘のように見えたかもしれないが、『まじめが大切』は美しい嘘なのである。「唯一の美しいものは我々に関わりのないものなのだ」（『嘘の衰退』）即ちウィットはワイルドの唯美主義の中核でもある。ただし彼は唯美主義をどの程度信奉したか。彼には醜も見たのだ。唯美主義は醜を遠ざけたいという願望ではないか。主義というよりも。

また『獄中記』は、比類ない芸術家の、俗な快楽への悔恨としても読める。それはワイルドにとって自己のキャリバンを写した鏡なのだ。その逆の鏡が『まじめが大切』であろう。‘Extremes meet.’ というが如く、1895年には、ワイルドの内なるナルシスとキャリバンがひとつになった。それ故、上記二作は表裏一体の鏡がある。当然、作者はひとりであるのだし。“Why is it that one runs to one's ruin? Why has destruction such a fascination?” “In old days half of my strength was my vanity.”（『書簡集』）ワイルドは自ら進んで破滅と虚栄を同時に求めたのである。ヴィクトリアニズムの虚栄への警鐘などは表面的なことに思える。ワイルドには警鐘の意義以上に、その限界さえも見えたに相違ないから。また最も御し難かったのは彼自身の虚栄心であったろうから。虚栄が最高度に高められたとき、彼の精神は、その身をもつての代償を求めたのではなかったか。虚栄と同時に、破滅へと進んだこと。また、ナルシスとしての自己と、キャリバンとしての自己を同時に実現したこと。心眼と同様に、肉眼をも信じたこと。——ワイルドは逆説の論理を単なる観念としてではなく、現実実践してみせたのである。この事実からも、ワイルドが逆説をただ口先だけでひねりだしていたわけではないことが分か

るであろう。彼が真の逆説家たる所以である。実にワイルド自身がパラドックスに他ならなかったのだ。

ワイルドの言を通して、人が自己の中の逆説に気づくか否か——ウィットに富んだ人間と公式的な人間のどちらがよりよいか——おそらく解答は出まい。なぜなら「浅薄な者だけが自分を知っている」が、その逆もまた真なのだから。

ワイルドと私——ひとつの自分史——

西村孝次

（日本ワイルド協会顧問）

およそ「時間」というものには、物理的な時間と人間的なそれとの二つがあるのではなかろうか？ つまり、ただの一年がその長さとも厚みにおいて十年に匹敵する場合もあれば、またその反対の事例も少なくない。

わたしにとって、1924年（大正13年）という年は、その後のわたしにとって決定的な一年であった。その前年、わたしたちの家は破産し、三百五十年来住みなれた京都を去って山科へ移っていたが、この年の四月から中学五年生のわたしは本多平八郎先生（のちの大阪外国語大学名誉教授）に英語を教わることとなった。それはわたしを英語という異国の言葉に開眼させる幸福をもたらしてくれた。また、その同じ月、志賀直哉を訪ねて西下した東大生・小林秀雄に初めて会った。小林は父かたのいところで、かれによってわたしはおのずから文学への道を歩みはじめるようになった。そして、その年の秋、わたしはひとりの女とめぐりあった。わたしは初恋をした。

女はマドンナであった。そしてまた Bestia trionfans（勝ち誇れるけだもの）でもあった。わたしは歓喜とともに絶望に打ちめされねばならなかった。礼賛と性欲のはざまで、わたしはのたうち回った。べつに異常でも変態でもなかったはずだが、ただ少しばかり強すぎたのかもしれない。わたしは純潔を求めながらも汚辱にまみれた。そんなときなのだ。「官能のほかに魂を癒せるものはない、ちょうど魂のほかに官能を癒せるものがないように。それこそが人生の大いなる秘密のひとつなのだ」というワイルドの箴言（『ドリアン・グレエの絵姿』第一章）を読んだのは。

わたしの恋は、ほとんど当然のように、みのらなかった。わたしは東北大学に入り、仙台の朝と昼は目をつぶしそうな濫読に、夜は身をすりへらすまでの酒と女に明け暮れた。京都—仙台間の往復の途次、いつもわたしは鎌倉に小林を訪ね、かれの恐るべき誘惑によ